



日高管内平取町二風谷にある町立二風谷アイヌ文化博物館。その展示室に、さまざまなアイヌ文様の刺しゅうを施した着物や頭巾、彫刻を施した盆やたばこ入れが並ぶ。天井からアイヌ文様の15枚の布がつり下げられ、民族文化を華やかに伝えている。

◆差別超え「道民の宝」に

同博物館と近所の「萱野茂二風谷アイヌ資料館」にある生活用具1121点が今年2月、国の重要有形文化財に指定された。これらの指定文化財に刺しゅうや、切り抜いた白布を生地に張りつける切伏（きりふせ）、彫刻でアイヌ文様が描かれる。同博物館の学芸員、吉原秀喜さん（44）は、「ちよつとした空間があれば文様を施す習慣が、少なくとも縄文期以来受け継がれてきた」と話す。同博物館によると、成人前の娘は針仕事を身につけることが義務だった。若い男性に自分が刺しゅうした手甲（てっこう）、脚半を贈るのは「妻

の仕事を一通りこなせるようになったよ」というメッセージだった。また、男が木彫りが上手なのは、刃物を巧みに使える証拠。狩猟に必要な弓矢やワナを立派に作る事ができるので、食べ物に困ることはないという意味になる。年ごろの男は腕によりをかけて彫り物をして好きな娘に贈ったという。

アイヌ文様の基本は、渦巻き（モレウ）とげのある形（アイウシ）うろこ（ラムラムノカ）の3種類。これらを組み合わせ、連続した線で結んでいく。吉原さんは特にモレウを重視し「一つの要素、パーツにとどまらず、文様全体をコントロールし周囲に展開する役割を持つ」と語る。

着物の場合、普段着はよそから侵入されやすい「すそ」「えり」「そで」などに文様を描いた。渦巻きやとげが苦手な悪魔を追い払う意味があった。踊りや祭礼に着的る衣服は背中や全身に文様が描かれた。

明治以降の中央政府のアイヌ同化政策のため、サケ漁、入れ墨、アイヌ語など多くのアイヌ文化が失われ、さまざまな差別と就職など実生活の不利のため「アイヌ的なもの」を自ら避ける傾向も出た。アイヌ文様の伝承も危うい時代を経て、ようやく道民の宝（北海道遺産）と認められる時代が来た。今、アイヌ文様の工芸家は道内で数百人にのぼる。

まちづくりと遺産

アイヌ民族の文化と歴史は平取町の個性だ。同町はこの個性を町外に強調する計画だ。

まず、アイヌ文様を基本にしたロゴマークを作成する。町外へ発信するパンフレットやポスターに印刷する。

次に、アイヌ語に由来する町内の地名を調査し、研究者や町民が自由に検索してその意味を知ることができるシステム作り。その土地に03年度から地名看板を設置する。

看板のデザインにアイヌ文様を活用するアイデアも出ている。

二風谷工芸センターは、地域に住むプロの工芸家を講師に、アイヌ文様のコースター作りを手ほどきしている。町立二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館、マンロー記念館とともに民族文化を人々に伝えている。

Data



●お問合せ先

平取町立二風谷アイヌ文化博物館

Tel.01457-2-2892